

強度行動障害支援者養成研修 実践報告

あかりの家 課長 前阪 敬介
(公認心理師・臨床心理士)

自閉症総合援助センター

- 生活の場
- 働く場
- 地域生活支援
- 相談支援
- 療育支援
- 地域作り
- 支援者養成



障害者支援施設
あかりの家

- 相談支援
- 地域生活支援
- 地域作り
- 支援者養成



地域支援センター
あいあむ

- 相談支援
- 療育支援
- 就労支援
- 地域生活支援
- 地域作り
- 支援者養成



ひょうご発達障害者
支援センター
クローバー

- 療育支援
- 地域作り
- 支援者養成



障害児通所支援事業所
あかりの家

高砂市

通所・多機能型事業所
ワークホーム高砂



- 働く場
- 就労支援
- 地域作り
- 支援者養成

通所・多機能型事業所
納豆工房
なっとこちゃん



- 働く場
- 就労支援
- 地域作り
- 支援者養成

グループホーム
オリーブの家



- 生活の場
- 地域生活支援

グループホーム
希望山荘日笠



- 生活の場
- 地域生活支援

グループホーム
友愛の家



- 生活の場
- 地域生活支援

各事業の有機的な連携と
関係者・関係機関との協働

障害者支援施設 あかりの家

－ 行動障害のある人たちの人生の応援がしたい －

兵庫県高砂市

1986年開設（現在37年目）

<利用者> 48名中...

・ 自閉症： 約9割

・ 知的障害 重度： 97%

・ 年齢： 46歳～55歳が2／3



<事業内容>

・ 施設入所支援（40名）

・ 生活介護（40名）

・ 短期入所（6名）

・ 日中一時支援（10名）

・ 障害児等療育支援事業（県・姫路）

・ 兵庫県強度行動障害地域生活支援事業



① 全員が生産的作業に所属

② レインボーデー

公共交通機関利用での少人数外出

③ ライフイベントへの参加

家族の一員として、きょうだいの
結婚式、家族の葬儀への参加

④ リハビリ的ショートステイの
受け入れ

行動障害等の理由により、地域生活
が困難になられた自閉症の方たちの
短期入所受入れ（1995～）

⑤ 自閉症療育のキーワード集
－いい実践は言葉に残す－

（2002～）



兵庫県

強い行動障害がある方や そのご家族への支援事業

集中支援

行動障害がある在宅の障害者を、専門知識を備えた支援施設で24時間、マンツーマン体制で支援します。支援期間は大体3～6ヶ月程度で、集中支援後に障害福祉サービスの利用ができることを目指します。

地域支援

集中支援を受けた障害者の方が、住み慣れた地域で安定した生活が送れるよう、所属施設（通所）職員やヘルパー等が実習を通して、行動特性や支援方法を学ぶことを目的とします。その後、所属施設への訪問助言を行います。

兵庫県 強度行動障害地域生活支援事業について

兵庫県と県内市町が国の補助金を活用して行う事業です。激しい行動障害がある方を支援した経験がある専門事業所（障害者支援施設あかりの家：高砂市）が、本人に合ったサポート体制の構築や対人環境の整備などの支援を、チームで行います。

- 利用者の経費負担：無料（期間中の通常生活にかかる経費は必要）
- 対象者：原則18歳以上で「行動関連項目」判定基準で10点以上の方
- 申請先：お住いの市町の障害福祉課



取組実績について

修了者6名（令和5年4月時点）

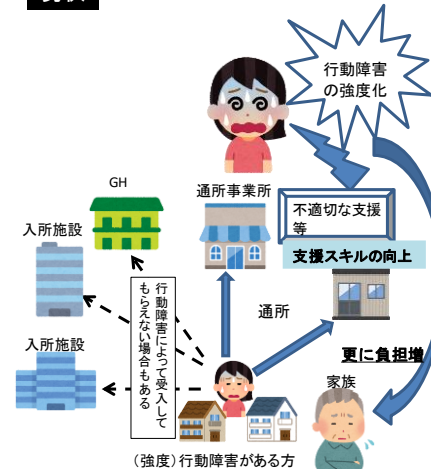
※修了者の様子は、修了者の関係者からの声をご一読ください。

問い合わせ先：〇〇市〇〇課 担当係：（平日9時～17時）

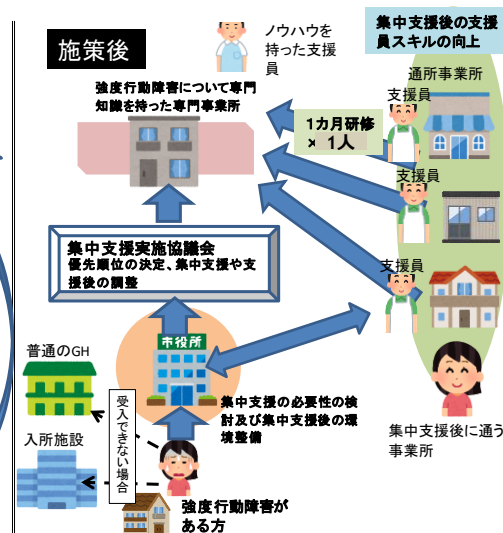
「お住いの市町の障害福祉担当課」

事業の大まかな流れ

現状



施策後



集中支援ってどんなことをするの？

①集中支援前期（アセスメント・行動支援：概ね1ヶ月）

事前に所属施設・家庭を訪問し、情報収集を行い、受け入れ初日に臨みます。

まず、専門事業所で食事・睡眠・排泄／日中活動を軸に、行動の修復や生活リズムの再構築を目指します。事業嘱託医と緊密に医療面等の調整を行いつつ、**先回りの支援を通して成功体験を積み重ねる**ことを目標に支援します。

②集中支援中期（家庭支援を並行：概ね1ヶ月）

①期のテーマと、家庭への帰省を並行して取り組んでいきます。

家庭で予想される行動に対して、家族と一緒に考えていきます（家族の方の実習等）。

事業終了後の地域生活を視野にしたメインテーマとなる取り組みとなります。

③地域支援期（概ね1ヶ月）

(A) 専門事業所での実習（所属施設の職員やヘルパー等。約2～3週間）

専門事業所での関わりを通し、対象利用者の行動特性や対応を学んでいただきます。

(B) 所属施設への訪問助言

家庭から所属施設へ通所し、事業後の地域生活を想定した環境で訪問助言を行います。

地域支援について

①専門事業所での実習（2～3週間）、②所属施設への訪問助言。期間は調整に応じます。

実習時、宿泊を希望される方は調整に応じます。

留意事項

- 必ずお住まいの市町を通して申請してください。
- 集中支援期間中の通常生活にかかる経費は必要です。
- 集中支援後もお住まいの市町や地元の事業所、専門事業所と協力してください。

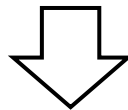


2

あかりの家における強度行動障害の方への支援

(1) 理 解

- ▶ 強度行動障害は、興味関心の限定やこだわり、それに対する過度な執着や感覚の過敏性といった障害特性に環境がうまく合っていない事により、人や場に対する嫌悪感や不信感を高めてしまうことが原因です。



(鳥取大学大学院 教授 井上雅彦)

- ・ 繰り返せば繰り返すほど、自分では止める事が困難になる傾向。
- ・ その刺激に支配されてしまうかの如く、“見れば××してしまう” と固着化していきやすい。
(行動の形骸化)
- ・ そのスパイラルを、自分では断ち切ることが非常に困難な方たち。
(あかりの家)

①「個別的理解」と「類型的理解」 (あかりの家 亀山部長 文章より引用)

「類型的理解」

- ・認知発達レベルと行動障害の内容はある程度、相関性がある。

<参考>太田Stage評価 (『自閉症治療の到達点』 太田昌孝・永井洋子 編著)

太田Stage	認知発達	言語	対人関係	行動障害 (例)
Stage I	～1:6歳	多くの方が音声言語なし。 (要求はI-2ではクレール、I-3では間接的要求 (ちょうだい、おじぎ等))	孤立群・受動群 (幼児期には、自分勝手な動きは素早い が、人を無視している印象が強い)	自傷、異食、睡眠障害、こだわり(物の位置等、視覚的な同一性保持)。 パニックや他害(嫌いな刺激に対する反応やイライラから等の情動面との結びつき)。
Stage II	1:6～2歳	音声言語がある方が多くなる。しかし、使用頻度は乏しく、言葉数も限定的	孤立群・受動群	自傷、こだわり(物の位置、場所等)。 自傷、破損、パニック、他害(パニックに随伴する場合が多い)
Stage III-1	2:6歳前後	語彙数増え、単語が明確な意味を持つが内容は限定的 オウム返し が目立つ。	孤立群・受動群に加え、積極奇異群が見られるようになる。 関わりは一方向的。	パニック、他害(素手)が目立つ時期。 働きかけのちょっとした不手際が大きなパニックにつながりやすい。 破壊(刺激に対する反応として)。 こだわり(手順や日課等、見えないもの)
Stage III-2	3歳～	2～3語文。 言語でのコミュニケーションが可能となる	孤立群・受動群に加え、 積極奇異群が増加。	物を使う他害がある場合あり。 自傷は減る傾向があるが、掻き壊し等 は見られる。他者へのしつこい関わり。

② 強度行動障害の方の日常場面における傾向

自閉症の強度行動障害の方は、部分的な認知という特性に加え、「困った行動の場面だけでなく、日常的に・・・」と、以下のような傾向が見られる方が多い。

	内 容
1	多 動 ・ 椅子に座っていることが難しい、身体の常同的な動き。また、 <u>常に周囲の刺激の動き（人、物）に対して、眼がキョロキョロ動いている等。</u>
2	衝動性 ・ 目に入った刺激に、つられるように即時的に反応しやすい （例：飛びつくような動き、手が上がってくる）
3	強迫性 ・ 目に入った刺激や一旦取りかかったこと等に強い執着を示し、視点を切り替える事が困難

感情の高揚（イライラや焦り）や葛藤を内的に保持することが困難で、“行動化”しやすい。

③ 「行動の根っこ部分は日常の行動と“連続体”？」

「『問題度の低い』行動に気づき、
それがパターンとして確立する前に早く介入して
ください」

〔ウエンディ・ローソン（オーストラリア アスペルガー症候群当事者 日本での講演）〕
（下線は亀山）

前ページのように、強迫性、多動性、衝動性などは、困った行動の場面だけでなく、日常の行動の中にも“**連続体**”として見られることが大半ではないでしょうか？。

問題となる行動の根っこの要素が共通するとした時、その強さや頻度が低い、日常繰り返されていて、そう問題とは思われない行動にこそ、積極的な応援を丁寧に行い、和らげてあげることが成功への秘訣ではないでしょうか。

（あかりの家）

<強度行動障害の支援の難しさはココ>

強度行動障害に有効な支援構造

図2 強度行動障害に有効な支援構造

(飯田雅子 2004)

時間をかけて、成功経験を重ねる

衝動性支援

強迫性支援

知覚過敏への支援

TEACCH

生物学的条件の整備 (生活リズム・食事・排泄・睡眠)

引用：強度行動障害支援者養成研修【基礎研修】
受講者テキスト

<あかりの家が考える視点>

… 私たちにもある行動

◆ 医療とも連携しながら

◆ 「**“先回りの支援”を通して、
“しなくても済んだ” という**

成功体験を積み重ねる事に尽きる」

(行動を起こしてしまったからの事
後修正は更に強迫性が増す可能性)

① ハードルの低い「日常場面」こそ、
軽減の視点を持って積み重ねていく
〔例：食事（を見たら突っ走る等）〕

※困っている行動の場面＝多動、衝動、
強迫性が顕著→対応のハードルが高い

② 少なくとも「前兆レベルで働きかけ、
『○』の積み重ね」を！

（２）支 援（ベースとなる基本の考え方）

【視点1】 利用初日を成功させてあげる

基本的な考え方

「多くの場合、こじれきった関係や環境の下での修復は相当に困難である。そういった場合は、一旦その関係と環境から離れて、療育機能を持った専門機関を利用する。」ことがあげられている。

（参考：「全自者協調査研究プロジェクト」09.）

そこで、環境を変えた利用初日は大きな方向の分かれ目

これまで、行動問題が頻発してしまった状態を途中から、修正することの困難さを私たちは痛感してきました。

いいスタートを切り、それをリズム化してあげる。白星街道！

“あかりの家では、うまくいけそうだ”という好循環の見通しを持ってもらいたい。 **そこでは、先回りの支援等を通して、“行動問題等をしなくても済んだ”という成功体験が大きな意味を持つと考えます。**

【視点2】 行動障害につながりやすい傾向等を日常の支援レベルで軽減

① 食事・睡眠・排泄／日中活動の充実

基本的な考え方

「**食事・睡眠・排泄／日中活動**」は生理的側面だけでなく、精神的な側面の影響を強く受ける。

行動障害の背景に、「**食事・睡眠・排泄／日中活動**」に大きな乱れがあることが多い。

また逆に、強い行動障害によって、これらが大きく乱れることもあって、両者の相関関係は強い。

「**食事・睡眠・排泄／日中活動**」は支援の基本。

基本がしっかりしていれば、行動の乱れも減る。

「**食事・睡眠・排泄／日中活動**」の支援ができるかどうか、
それであかりの家の支援力が決まる。

（19．兵庫県強度行動障害支援者養成研修 あかりの家 三原前施設長）

日々、必ず繰り返される生活の軸。ここが整うと、自ずと生活リズムが整う。
この“やりとりが噛み合う” or “やりとりがズれる” とでは大違い！

(表1) (例) 「食事・睡眠・排泄 / 日中活動」の躓き

領域	躓きの例	考えられる背景
食事	①咀嚼、嚥下 (丸飲み、えづき等) ...吐き出し ②強迫的な掻き込み食べ ③一気飲み、最後の一粒が残せない ④食器の引っくり返し ⑤他者の物をとる	①えづき：状態が悪いと首回りの力みや口周りの動かし方等、円滑に出来ない事がある。→一口量、口に入れるペースを支援。 ② 多くの場合、皿に口をつけて掻き込む (箸で挟む、適切な一口量、口の物が少なくなってから次を食べる等の支援要) ③一旦取りかかった事を途中で止める事の困難さ
睡眠	①不眠 (昼夜逆転) ②二度寝できない ③徘徊 ④騒ぎ ⑤水遊び ⑥シーツ破り ⑦夜間の飲食等	①眠りが訪れる状態へ導くことの困難さ ・声が出続けている、独語 ・手足の動きを止めることが難しい ・こだわっている物への執着 ・気になることへの強い不安
排泄	①排尿 ・失禁、放尿、頻尿、尿が出にくい ②排便 ・便秘、頻便、失便、放便	失禁のある方の場合、「まず出し切れているか？」を疑う。 特に力んで排尿している方は要注意。 出ないことがある。腹筋を緩めて、排尿する手助け等を行う。
日中活動	①ゴロゴロ ②ウロウロ、走り回り ③特定の興味への没頭	作業等を軸に、“張り合い”のある日中活動の有無は、心理的側面の充足に欠かせない

② 身体に入った力を抜く



(挿絵：あかりの家 前田晴帆)

「“こころ”と“からだ”は密接な関係」

- ▶ 強度行動障害が見られる方は、特定の気になる物(事)に強い執着・警戒の心理的アンテナを常に張っている事が多い。
- ▶ その結果、身体にガチガチに力が入っている事が少なくない。



- ▶ 身体に力が入っていると、目に入った特定の刺激に対して、多動・衝動・強迫的な反応が一気に加速されやすい。
(素早く、キレがある動き：周りは止められない。怪我のリスク)



- ▶ 力を抜くことで行動が改善される訳ではないが、反応は緩やかになりやすい。適切な行動に導くための背景要因になりうる。

③ 動きのスピードを落とす／連鎖的な行動は区切る

- ▶ 多動、衝動、強迫性が高い方は、日常的に焦りや 慌ただしさがみられる事が少なくありません。
- ▶ 「一つひとつの行動に切れ目がなく、数珠つなぎ・連鎖的に動いてしまう」ことが特徴。
- ▶ ある行為が終わりきる前に、もう次の動きに入っている。

(例) トイレの戸を「バーン」と開けたかと思うと・・・

→スリッパも履かず → 足早にトイレに向かいながら →

→ズボンは下ろしかけている →

→トイレに入ったらすぐ尿を出して →出し切れてないから、
またトイレへ行く。出し切っていないからまた出る・・・

👉 どんどん行動が加速し、そうになると、目に入った刺激に即反応してしまう傾向が高まる。自分の意思に基づいた行動をとることが難しくなると考えます。→「区切り」「スピードを落とす」

④ 余暇で過ごせる活動の発掘



余暇で取り組んでいること



余暇で取り組んでいること



余暇で取り組んでいること



事例 1 Aさん（18歳）

* 個人が特定できない形に編集しています

○身長170センチ 体重130キロ

○自閉症・重度知的障害・てんかん・糖尿病

○家族構成：

父（50歳代）・妹（高校生）・母（病死）

○主訴：「入所希望だが受け入れ先が無い。どこでも受け入れられる人になってほしい」外食要求が強く暴飲暴食、窓ガラスを割る、左足すね付近の傷のかき壊し等があり、手に負えない。起床後布団から出てこず2時間ぐらい毎日家族と格闘になり、困っている。これらの不適應行動を改善したい。高校卒業後、進路が見つからず、在宅生活。

事例 1 Aさん（18歳）：基礎情報

○調査訪問時の様子：自宅での様子

（①特定のぬいぐるみがないと寝られない。②暴飲暴食 ③家の破壊行為）

○周囲からのサポートも厳しく、お父さんは一人に関わる事が多く、疲弊しきっている。妹は受験があるが集中できない環境。

○強度行動障害スコア 計36点

事例1 Aさん（18歳）：支援課題や目標

Aさんの支援における課題

①グループホームを探す

（1つ目の候補のGHが無理な場合を想定して）

②グループホームで実現可能な生活様式の確立

③父親との関係を含めた、家庭生活の大幅な改善

Aさんの支援における具体的目標

①基本的な生活リズムの確立

（食事・睡眠・排泄/日中活動）

②対人関係の取り方を学ぶ

③体重減

事例1 Aさん（18歳）受け入れ初期

①食事場面

（例）食事を挟んで食べる。ゆっくり噛んで食べる。お茶を、何回かにわけて飲むなど。

職員とペースを合わせて食べる。食事場面も貴重な療育的支援の場としてあかりの家は捉えている。

→日常場面を通して、積極的に支援を行っていく

事例1 Aさん（18歳）受け入れ初期

②睡眠

- ・利用当初より睡眠時間は安定していた。

21：00～7：00。家庭では睡眠の乱れが顕著にみられたが、あかりの家の環境では一度も乱れたことはない。

- ・1年目の職員も利用2か月目から夜勤対応に入っているが大きな問題はなかった。

→家庭環境から切り離し、生活リズムを整えていく

事例1 Aさん（18歳）受け入れ初期

③排泄関係

- ・ 事業開始前はグループホームで、放便や失禁等あったが、利用当初より排泄関係は大きな問題はない。
- ・ 硬めの便だったが、定期的に排便も確認。
- ・ 強度行動障害の方は排泄関係でトラブルを抱える方が多いが、排尿の仕方もスムーズ。

→生活リズムが整っていく

事例1 Aさん（18歳）受け入れ初期

④日中活動

対応職員を1名配置して、日中活動に参加してもらった。糖尿病があるため、“歩行+作業”を一つの形として午前・午後に活動を提供。具体的には歩行30分、作業60分といったパッケージで継続的に実施。

作業に関しては、機械部品の組み立て、リングを回して締める仕事を基本的にはやっている。ペースは遅いが作業に取り組む構えは出来ている。

→日中活動（運動+働く）を通して、生活リズムを整えていった

事例1 Aさん（18歳）：医療関係について

1. 精神科受診

①糖尿病患者に禁忌の薬が処方されており、変更。その他、大きな投薬調整は1か月程度で終了。2週間に1回ペースで受診。（対象者の状態によって通院ペースは変化あり）

2. 糖尿病外来受診

糖尿病外来を受診して、薬の調整と運動等の相談を継続して行った。内服薬調整開始。20分程度の運動から徐々に強度をあげて運動を実施した。

▶ 体重 130kg（事業開始前）→115kg（2か月経過）

▶ 血糖値 145 （事業初日）→109 （2か月経過）

▶ HbA1c ＊糖尿病の目安となる数値

利用前 二桁以上→7.3%（1か月後）→6.1%（2か月後）
（正常値 4.6－6.2%）

事例1 Aさん（18歳）：医療関係について

3. 皮膚科受診（足の傷の完治を目指して）

利用開始直後より皮膚科にも定期受診。ジュクジュクでかなり広範囲で化膿していた箇所が現状ではかなり小さくなっており、事業終了前には完治。毎日の処置と傷を触らない対応を続けた成果。当初、傷をかき壊しそうな行動も見られていたが、日課の確立やかゆみを先生へ細かく伝え、薬を変えてもらうことで何とか乗り切った。今では全く触る気配もない。

4. 歯科受診

あかりの家で行っている歯科検診も抵抗なく、受けられた。虫歯が一本見つかったが処置も出来た。
（ほかの事例では虫歯多数の方もいた）

事例1 Aさん（18歳）：家庭支援について

- ・2か月経過時、父があかりの家に来園 食事対応と歩行を一緒に行った。
- ・2か月経過時、初めての1泊帰省実施。職員1名が付き添って帰宅。夜間帯は家族だけで対応してもらった（1泊の目的は、暴飲暴食等の不適応行動をせずに、新しい形を入れて、成功体験をつくる。）
- ・帰宅はハードルが高いが、とにかく成功させる。
- ・家のレイアウト変更、日課の再構築（再スケジュール化）などを事前に家族と行っておくことが鉄則。＊初日の成功が鍵！！

事例1 Aさん（18歳）：移行先について

- ・事業期間中に本人が利用できるグループホームが見つかり、契約を行った
- ・強度事業3か月目は地域移行期間のため、職員が付き添い、生活拠点となる事業所職員と一緒に「本人が地域生活にどうなじめるか？」を考えながら支援を実施。
- ・この事例では2週間以上、職員を現地へ派遣して、フォローを行った。

事例 1 Aさん（18歳）

現在の様子（父や事業所からの聴き取り）

○グループホームを生活拠点にしながら、日中は生活介護事業所へ通所。

○家庭の帰省も月1回程度行っている

○体重は90キロ台になっている
（事業開始前は130キロ）

○強度行動障害スコアは0点（事業開始前は36点）
（ここまで劇的に改善される事例はかなり珍しい）

○今年度、県内で開催されたスポーツ大会等にも参加できており、あかりの家職員も現地で本人の姿をみたと報告あり。

事例 1 Aさん（18歳）

まとめ

○家庭との切り離しにより、劇的に行動改善を図った（初日の成功は力ギ。軸職員をしっかりと配置する）

○食事・睡眠・排泄/日中活動の安定

○体重減（糖尿病の改善）

○相談員の動き方の重要性（この事例ではないが、地域にある資源を活用する。発掘する）

事例 1 Aさん（18歳）

まとめ

○まずは日課を埋めるという発想（起床から就寝までのストーリー作り）

- ・ 家族の負担を減らすために活用できるサービスの情報収集！（行動援護・家事援助等）
- ・ 朝起きてから事業所へ通うまでの時間の使い方
- ・ 日中の事業所を利用後、就寝までの時間の使い方
- ・ 家族にだけ負担が行くのではなく、関係者が一体的に支えていく視点

事例 1 Aさん まとめ

親支援の重要性

- ▶ 強度事業では本人支援と同時に家族(施設職員) 支援にも着目している。
- ▶ 事業終了後の生活する姿を想像しながら、できることをどんどんやる。
- ▶ 本人支援よりも親支援はハードルが高い(気がする) 。だから一緒に乗り越える。今まで大変でしたね。。。でもこれから一緒にやっていきましょう
 - 具体的に（実践的に）親と一緒に支援をしていく
 - 本人の対応方法や家庭での過ごし方を具体的に現地で提案していく
- ▶ あかりの家という場所で本人と親が関わる場面を設け、成功できる状況で安心して関わる機会を設ける。
 - 関りの前後でご自身の対応の評価の記録を書いてもらう
 - 映像をとってもらう

事例 1 Aさん まとめ

親支援の重要性

- ▶ 親の考え方の特徴（クセ）を知る、伝える。

→文章の方が伝わる人、ニュアンスがすぐにわかる人、支援をしていると
いろんなタイプの親御さんがおられる。毎回その人に合わせた支援をする。

- ▶ 家庭から切り離しをしている間に、家族の精神的な回復、もう一度本人と関わるために背中を押す作業が必要となる。

（例）

- 自宅のレイアウト変更（職員が付き添い、本人も一緒にやってもらう）
- 日課の組み立て直し（本人が出来ることを一緒に考えて、具現化する）
- 使用できるサービスや地域資源の聴き取り（少しでも可能性があれば、見学へ一緒にいく）

Aさん近況について（2023年10月25日現在）

所属事業所職員からの報告

Aさんの日課

6：00 起床 ※起床時に服用する薬があるため（支援員の言葉がけにて服用）

6：30 グループホームにて朝食。※朝食後に服用する薬があるため（支援員の言葉がけにて服用する。）

8：00 グループホーム出発（送迎車にて） 8：30 生活介護事業所 到着

10：00 午前活動（自主製品創作や公園清掃などの外活動） 11：30 午前活動終了

12：00 昼食

13：00 午後活動（自主製品創作や公園清掃などの外活動） 14：00 お茶休憩

14：20 午後活動再開 15：00 活動終了

15：40 終わりの会

16：00 通所帰宅

17：00頃から グループホーム順次帰宅

18：00 グループホームにて入浴

18：30 グループホームにて夕食（※入浴・夕食の順番が変更になる場合がありますが

不安に感じることなく行動できています。）夕食終了後服薬

21：00頃 就寝準備・就寝（眠前薬があるため服用あり）

Aさん近況について（2023年10月25日現在）

所属事業所職員からの報告

- ①A 氏の昔のケース（自宅など）ではお茶への要求が強く、お茶を大量に飲むことがあったそうです。そのため施設の方で決めた水分量を提供し、飲む時間もパターンを決め、現在では過剰なお茶の要求はありません。
- ②自身の要望を適切に伝える方法が分からず、意思を伝えたいがあまり昔は物に当たることがあったそうです。ですが現在は本人の要望を口頭で聞き取りし、支援員が理解に努めています。そのため現在他害行動はもちろん物に当たることありません。
- ③月に1日は家人が暮らしている自宅に帰省されています。帰省後も落ち着いて過ごされているとのこと。
- ④排泄面では以前体験利用していたグループホームではトイレのペーパーホルダーを破壊したり、トイレットペーパーの芯をトイレに詰まらせるなどのこだわり行動が見られていましたが、今現在ではありません。
- ⑤また睡眠に対して強い要求があり、昔は家人が言葉かけしても2時間は布団から出れないことがありましたが、今現在は概ね10分もたたないうちに布団から出られています。ですが、休みの日には布団の中で1日過ごそうとされるため本人の楽しみが少ないため、月に2回程度は移動支援に行き、本人の好きなマクドナルドや体重維持のためウォーキングを楽しんでいます。

事例1 Aさん（18歳） 生活の様子（写真）



事例1 Aさん（18歳） 生活の様子（写真）



事例1 Aさん（18歳） 生活の様子（写真）



Aさん 主治医よりいただいた言葉

修了者の様子を見て

生まれてからずっと家庭医として校医として彼の成長を見てきましたが、重度自閉症の彼なら仕方ないとあきらめていました。今回理論と経験で整えられた環境、あかりの家で考えを一つにするスタッフに受け入れられると強度行動障害に悩む人も変われることを確信させてもらいました。

今回あかりの家で会った彼の様子は自立へのフロログでした。行動制御ができ運動療法も功を奏し、糖尿病高脂血症の内服薬は減り、自傷行為がなくなり傷も治癒し健康状態もよくなりました。地域で暮らす基本の「①仕事をする事」

「②規則正しい日常生活習慣」を改めて作ってもらいました。これで、いつか好きなことで彼の満足した笑顔を描くことができるようになりました。これから先も支援という『あかり』に照らされてさらには彼自身の『あかり』を持って歩いてもらいたいと思います。

(修了者の主治医)

発表は以上です

ご清聴ありがとうございました